

芸術鑑賞時において鑑賞者の作品世界と作者世界の形成が 果たす役割の実証的検討

The Role of Viewers' Formation of Artwork-world and Artist-world during Art-appreciation

松本 一樹[†], 岡田 猛[†]
Kazuki Matsumoto, Takeshi Okada

[†] 東京大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, The University of Tokyo
k-matsumoto@g.ecc.u-tokyo.ac.jp, okadatak@p.u-tokyo.ac.jp

概要

近年の芸術鑑賞の心理学研究では、鑑賞者の作品創作プロセスの認識が作品の美的な印象に対して大きく関わっていることが示されてきた。本研究はこれに沿い、作者の方に意識を向けながら作品を見ることと、作品自体の表象する意味世界（作品世界）の形成の仕方（特にその想像の広がりやその他の美的印象等との関係性を検討した。写真を素材とした実験を行った結果（ $N=43$ ）、作者に意識を向けることで作品世界に関する想像が促進され、かつその想像の促進度と作品に対する好みや感嘆といった美的印象などが関連していることが示された。

キーワード：鑑賞、想像、美的印象、作品世界、作者世界

1. 問題と目的

芸術の持つ性質についての問題は、心理学において、芸術のもたらす快い感情(美的印象)という効果とそれに対する要因との関係性の分析という図式に置き直された上で検討されてきた。近年はこれらの要因間の関係性を整理して包括的な鑑賞のモデルを提唱する研究が盛んである[1]。この代表として、Lederら[2]は情報処理段階モデルを提唱している。このモデルでは、芸術作品の鑑賞の過程を、知覚的分析、潜在的記憶統合、頭蓋的分類、認知的習得、評価という5段階から構成され、段階が進むにしたがって高次の認知過程が関わるものとみなしている。

松本ら[4][5]は、鑑賞過程の高次認知処理の中で、作品創作プロセスの認識（作品に反映されているその作品が創作されるプロセスにおいて関わった創作者の行為や思考などを鑑賞者がどう認識するかという部分）に特に焦点を当てて実験を実施した。この結果として、鑑賞者の作品に対する美的印象には、鑑賞対象の作品の創作プロセスの認識の仕方が大きく関与していることが示された。さらに、鑑賞者自らが創作経験を得る

ことで創作プロセスの認識を通じて美的印象がポジティブに変化するということが結論づけられている。

本研究は上記の研究の流れを踏まえ、さらに鑑賞のモデルを拡張することを目指すものである。松本ら[4][5]では、創作プロセスの認識という要素に焦点を当てる目的で、実験の素材として創作折り紙が選択されていた。創作折り紙の鑑賞においては一般に創作プロセスの認識の重要性が高くなる一方で、作品が表象している意味世界やそこから広がる想像などについては重視されないという傾向がある。しかしながら、絵画、映画、文学、演劇、歌曲など非常に多くの芸術領域では、作品が表象する世界についていかに認知的に処理するかが重要な役割を持っていることは自明である。本研究は、この「作品内にシンボルとして描写されていると鑑賞者が認識するか、その延長として記憶などと統合しながら想像する形で形成される意味の集合」を「作品世界」として定義する。そして、作品世界の形成が重要な意味を持つと想定される芸術領域（今回は写真作品を採択した）における鑑賞過程において、既に扱われた創作プロセスの認識（本研究では「作者世界」の形成として以下のように定義し直す：「作者的/物理的状況や創作プロセスについて鑑賞者が主に想像によって思い描く、現実世界の部分集合」）がどのような役割を持つかについて実験を通じて検討した。

本研究では、作品鑑賞時に得られる（特に作品世界に関する）想像の広がりや程度に特に着目した。鑑賞時に対象からいかに想像を広げるかということは近年対話型鑑賞などの美術教育の領域でも注目されている要素である（例えば國清[6]など）一方で、そのことが何によって達成され、作品に対する美的印象などの鑑賞における他の要素とどのような関係にあるのかといったことについては実証されている部分が少ない。そこで本研究では想像を促す要因の候補として、作者に

対する意識（作品世界の形成への思考の方向付け）を持たせることを想定した。これは、作品世界について方向付けを与えられないまま想像を広げる場合、鑑賞者自身の自由な想像に任される部分が大きすぎるために逆に想像が促進されにくい一方で、「作者にとってこの描かれている世界がどのように見えていたか」という思考がここに加わることで作品世界について想像する方向性が定まり結果として想像される内容も豊かになるという過程があり得ると考えられるためである。

2. 方法

参加者

クラウドソーシングの web サービスである「ランサーズ」上で実験参加者を募集し、43 人の成人を対象に web 上で実験を実施した。

手続き

実験参加者は事前に作者意識条件・統制条件（後述）のいずれかにランダムに割り当てられ、実験の概要に同意をした上で、質問紙調査、写真鑑賞課題、印象評定の順序で手続きを進めた。最後に参加者には普段の芸術活動について自由記述での回答を求め、その記述内容から職業として芸術的な表現・創作に携わっていた経験を持っていると判断される参加者 3 名（作者意識条件 2 名、統制条件 1 名）を以降の分析から除外した。全体の所要時間は 1 時間程度となった。

質問紙調査では鑑賞に関係することが予想される個人特性として各参加者の曖昧さへの態度（曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターンであり、「曖昧さの享受」「曖昧さへの不安」「曖昧さの受容」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」の 5 因子によって構成される）が西村[7]の開発した曖昧さへの態度尺度によって測定された。各下位尺度の平均得点（標準偏差）は、それぞれ 4.17 (0.62), 3.21 (0.69), 2.86 (0.62), 3.50 (0.54), 2.68 (0.69) となった（西村[7]と同様に 6 件法での回答を求め、“まったくあてはまらない”を 1 点、“非常にあてはまる”を 6 点として算出している）。

次に写真鑑賞課題として、参加者は 9 枚の写真（web 上で写真家がクリエイティブ・コモンズライセンスを表示した上で発表しているもののみを使用した）を固定の順序で 1 枚ずつ見た。実験は参加者が各自 PsyToolkit のサーバーにアクセスする形で実施され、各写真は参加者の使用するコンピュータのブラウザ上に

解像度 800×600 ピクセル以内で表示された。1 枚の写真の表示時間は 200 秒で、その間に参加者は同じコンピュータ上でテキストエディタを開き、写真を見て思いついたことや想像したことを自由に記述した。

全ての写真を見終わった後、最後に写真に対する参加者の印象を評定尺度を用いて測定した。項目には写真から得られた想像の量（想像促進度）の他、好み、没頭（集中）の程度、感嘆の程度とその他 4 項目（今回の分析では用いない）を使用した。

実験条件の設定

独立変数として、写真を見る際に作者意識条件の参加者は、3 枚ごとに「この 3 枚の写真は同じ撮影者によって撮影されたものである」という教示を与えられた。一方、統制条件の参加者は同じ写真の組み合わせに「この 3 枚の写真は同じ地域で撮影されたものである」という教示を与えられた。これらはいずれも提示された 9 枚の写真に関する事実の情報であり、条件によって得られる情報の種類が異なるという操作を行ったことになる。

3. 結果と考察

個人特性と想像促進度の相関

本研究で特に着目している想像促進度と個人特性（曖昧さへの態度）との相関を下位尺度別かつ実験条件別に算出し、多重比較の補正（Bonferroni 法）をした上で計算したところ、実験条件における想像促進度と曖昧さの享受の相関のみが有意になった ($r = .64, p < .05$)。統制条件では両指標の相関は有意にならなかった ($r = -.07, p = .76$)。この結果から、曖昧さへの態度のうち特に「曖昧さの享受」（“いろんな可能性がある” “すべてを試してみたくなる” などの項目からなり、曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向）とされる；西村[7]が今回の鑑賞過程である程度の役割を果たしているものと推測されたため、以降の分析では個人特性の内で曖昧さの享受特性のみを説明変数として追加した。なお、曖昧さの享受項目について統制条件の参加者 1 名に極端な回答傾向（全体の平均 - 標準偏差×3 未満の値）がみられたため、この参加者の回答を外れ値として以降の分析から除外した。

写真に対する印象の条件間差

写真に対する印象を測定する各項目の平均値・標準偏差は表1のような結果となった。

想像促進度（標準化済み）を従属変数，実験条件および曖昧さの享受特性（標準化済み）を独立変数として重回帰分析（共分散分析）を行ったところ，それぞれ偏回帰係数は有意な値となった（ダミー変数として統制条件を0，作者意識条件を1と設定したときの実験条件： $b = .71, t(36) = 2.68, p < .05$ ；曖昧さの享受特性： $b^* = .48, t(36) = 3.51, p < .01$ ）。なお，独立変数に交互作用項を含めても，交互作用項は有意にならず，AICによるモデル比較では交互作用項を含めないモデルが選択された。この結果より，写真作品を鑑賞する際に想像が豊かに促進されることを規定する要因として，曖昧さの享受特性が高い傾向にあることと，作者を意識しながら鑑賞することの2つが存在すると考えられる。

想像促進度以外の項目についても同様の分析を行ったところ，いずれも各独立変数について有意な相関は得られなかった。このことから，今回のような文面で教示を与えて間接的に作品の作者に意識を向けさせるような教示では美的印象や写真鑑賞への没頭を向上させる介入としては十分ではないということが示唆された。

表1 写真に対する印象の各項目の平均（標準偏差）

	作者意識条件	統制条件
想像促進度	3.85 (0.85)	3.30 (0.75)
好み	3.26 (0.71)	3.01 (0.55)
没頭（集中）	4.85 (1.05)	4.75 (0.93)
感嘆	2.69 (0.82)	2.48 (0.68)

想像促進度と美的印象との関係性

美的印象として好み・没頭・感嘆をそれぞれ従属変数とし，想像と実験条件を独立変数とした重回帰分析を行ったところ，それぞれについて想像の偏回帰係数が正の値で有意になった（all $ps < .05$, Bonferroni法による補正済み）。このことから，写真から様々な想像が引き出されることと写真に対してポジティブな美的印象を持つことおよび写真鑑賞への没頭状態になることは関連性を持っていると推測される。ただし，すでに述

べたように想像促進度以外の各指標については条件間の有意な差が生じていないことや，想像促進度とその他の指標のいずれが時間的に先行しているかが不明であることなどを踏まえると，想像が引き出されることが具体的にどのような認知的なメカニズムによってその他の印象と関わっているかについては，本研究から結論づけるのは難しいと言える。

その他の考察・本研究の今後の展開

各参加者の自由記述を分析したところ，分析に用いられた39名の参加者のうち明確に写真の撮影者に関する事項に言及しているのは5名のみとなった（作者意識条件4名，統制条件1名，人数の比率に条件間で有意差なし）。このことから，今回の教示は意識に上るレベルでの思考内容について（特に作者への意識に関して）根本的な差を与えるほどの効果を持つものではなかったことが示唆される。その一方で，条件間で想像促進度に差があったことも確認されているため，これらを併せて考えると，ある程度作者の方に意識が向けられた状態で写真作品を見た場合，対象の作品世界の側の想像が促進されるという可能性が考えられる。

本研究の今後の展開としては，より強い効果を持つような教示もしくはその他の介入方法を検討していくことが考えられる。また，今回は作者世界の側に思考を方向付ける介入に焦点を当てたが，作品世界の側に思考を方向付ける介入とその効果についても検討の余地がある。これらの点について検討を重ねていくことで，鑑賞過程において作品世界と作者世界の形成という重要性を持つ両要素がどのようなメカニズムの中で機能しているかということの解明し，鑑賞の心理学研究への大きな理論的貢献が得られるものと期待される。

文献

- [1] Pelowski, M., Markey, P.S., Lauring, J.O., & Leder, H. (2016). "Visualizing the impact of art: an update and comparison of current psychological models of art experience", *Frontiers in Human Neuroscience*, Vol. 10, p.160.
- [2] Leder, H., Belke, B., Oeberst, A., & Augustin, D., (2004). "A model of aesthetic appreciation and aesthetic judgments", *British Journal of Psychology*, Vol. 95, No. 4, pp. 489-508.
- [3] Bullock, N.J., & Reber, R., (2013). "The artful mind meets art history: Toward a psycho-historical framework for the science of art appreciation", *Behavioral and Brain Sciences*, Vol. 36, No. 2, pp. 123-137.
- [4] 松本一樹, ルトコフスキトマシュ, 岡田猛(2017)「創作 経験は鑑賞過程をどのように変容させるか —心理・生理指標の複合的アプローチによる検討—」, 日本認知科学会第34回大会論文集, pp. 809-813.

- [5] 松本一樹, 岡田猛(2018)“プロトコル分析を用いた芸術鑑賞の認知過程の検討 —作品創作プロセスに対する鑑賞者の認識に焦点を当てて—”, 日本認知科学会第35回大会論文集, pp. 972-977.
- [6] 國清あやか(2016) “図画工作科における創造的想像力を育む学習指導に関する実践研究 —絵画作品の鑑賞を基盤とした小学校低学年の題材開発を通して—”, 美術教育学研究, 48, pp. 153-160.
- [7] 西村佐彩子(2007) “曖昧さへの態度の多次元構造の検討 —曖昧性耐性との比較を通して—”, パーソナリティ研究, 15, pp. 183-194.